

2025 (令和 7) 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

文 学 部

国 文 学 科

学校推薦型選抜(一般)

注 意 事 項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があってから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入
しなさい。
3. この冊子は6 ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があった場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は2 枚配付しますが、提出するのは1 枚だけです。残りの1 枚は下書き用です。
6. 小論文は縦書きで書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章は竹内整一『やさしさ』と日本人』の一節である。この文章を読み、後の問いに答えなさい。

「やさしさ」を共感・共生の倫理として考え、宗教的・形而上学的に飛翔^アさせることを否定し、「どこまでも有限・相対の世界に徹することをえら」ぼうとした花崎は、こう言っている。

無にひとしいものでありながら、自分と同じ運命のもとに他人もまたおかれていることを、身につまされて感ずることができたら、そこに生まれる感情は「やさしさ」と名づけられるだろう。

（花崎皋平『生きる場の哲学』）

花崎はこれを、社会の疎外状況のこととして述べているが、ここではそれを、より広く人間存在のヨウソウ^イのこととして受けとめておこう。自分という人間存在のありようが有限・相対であり、無にひとしいものと感じ、他人もまたそうであると感ずることができれば、そこに「やさしさ」が生まれる、と。

あるいは、「人間的な「やさしさ」は、虚無を知り、虚無を再確認し、なお虚無による虚無批判をやめない者が、孤立した闘いの中で知る至高の連帯の感覚である」といった栗原彬の発言（『やさしさのゆくえ』）も、ほぼ同じである（虚無の内容は、花崎同様、現代社会の疎外状況を前提にしている）。

じつはこうした無・虚無の認識をバイカイ^ウにして「やさしさ」のようなあり方を捉えようとする捉え方は、中古・中世日本のいわゆる無常感以来、日本人にとってはきわめて親しい発想のひとつであった。

常に飛花落葉を見ても、草木の露を眺めても、此世^{このよ}の夢まぼろしの心を思ひとり、ふるまひをやさしくし、幽玄に心をとめよ

（『心敬法印庭訓』^{ていきん}）

ただ人は情けあれ 夢の夢の夢の 昨日は今日の古 今日 明日の昔
ただ人は情けあれ 朝顔の花の上なる 露の世に

(関吟集)

ここでは、「飛花落葉」「草木の露」「朝顔の花」など——いずれも無常を象徴する典型的な自然現象であるが——を見てそれらと重ねて、そこから、この世は「夢まぼろし」なのだということを思いとれ、と論じている。この世の「夢まぼろし」ならざることを確かめる、ではなく、この世は「夢まぼろし」なのだ、「夢の夢の夢の」「世なのだ」と積極的に思い知れ、と。そのことを本当に思い知ったところで、「やさしさ」「情け」、また「幽玄」という美に心をとめよ、というのである。

しかし、^①だれがはたして「夢の夢の夢の」「世などと簡単に思い切れようか——」。

このような、より一般的にいつて、無常感と倫理という問題は、日本精神史ではかなり大きな問題であるし、また他のところでもたびたび論じてきたので、ここではそれ自体には深入りしない。が、「やさし」が、美的・倫理的肯定語として定着し出してきた背景にも働いていたと思われる次の歌に見られるような基本発想のあり方についてはあらためて確認しておきたい。

A 世の中は夢か現つか現つとも夢とも知らずありてなければ

(詠み人知らず『古今和歌集』)

つまり、「世の中」を「夢か現つか」と感ずる、「ありてなければ」と思う、その感じ方・思い方が問題なのである。「あはれ」とは、そうした驚きや感動や嘆息の表現であるが、日本人の精神伝統の基本には、文学であれ芸術であれ宗教であれ倫理であれ、つねにこうした感じ方・思い方がその根底に流れているといっているように思う。

九鬼周造は、晩年の情緒論(情緒の系図)において、「やさしさ」を「^{いたわ}り」「憐れみ」と同置して、それらをまとめて「もののあ

はれ」に総括している。

万物は、有限な他者であつて、且また有限な自己である。それが謂はゆる「もののあはれ」である。「もののあはれ」とは、万物の有限性からおのづから湧いて来る自己内奥の哀調に外ならない。客観的感情の「憐み」と、主観的感情の「哀れ」とは、互いに相制約してゐる。「あはれ」の「あ」も「はれ」も共に感動詞であるが、自己が他者の有限性に向つて、また他者を通して自己自身の有限性に向つて、「あ」と呼びかけ、「はれ」と呼びかけるのである。

(情緒の系図)

自己の有限性に対する主観的感情が「哀れ」であり、他者の有限性に対する客観的感情が「憐み」である。そこに通底する「あ・はれ」なる思いが、すなわち「自己が他者の有限性に向つて、また他者を通して自己自身の有限性に向つて」呼びかけ／呼びかけられ、呼応する思いが、それらの情緒の根底にあるというのである。

つまり、それらの情緒の示す自他の結びつきは、自他の無常性や有限性また偶然性といったものに対する深い思い(驚きや感動や嘆息を前提としており、そうしたものを介してはじめて自他が開かれ、呼応するというような結びつきとして理解されていたといつていいだろう。

「かなし」とは、相手の消滅のヨケン^オをふまえざるをえない危機感情でもあり、また「自分の力ではとても及ばないと感じる切なさ」の感情でもあるがゆえに、「愛し」はまた「哀し」でもあるという(『岩波古語辞典』)。^②同じように、「やさし」にもまた、そうした契機が多分に見いだされるといふことである。

唐木順三『無常』も指摘しているように、「此世の夢まぼろしの心を思ひとり、ふるまひをやさしくし、幽玄に心をとめよ」と言つた心敬は、しきりに「思ひ入る」「思ひをやる」「心をやる」といつた言葉を使つてゐる。「思ひ入る」「思ひをやる」ということは、自己が自己に固くこわばつていてはけつしてできないのであり、それをやわらげ解き放つことにおいてはじめて可能になつ

てくるものである。

無常迷懷の心、言葉をむねとして、あはれ深きことをいひかはし、いかなるえびす鬼ますら男の心をもやはらげ、はかなき世の中のことはりをすすめ侍るべき……

(心敬『ささめごと』)

——歌の道の目的は、無常の思いを語ることを中心に「あはれ深い」ことを言い交わして、どんな異国の鬼、荒ぶる男の心をもやわらげて、この世のはかなき理^{ことわり}を教えすすめるところにある。

無常の「あ・はれ」を介在させることによって、自他の心をやわらげ開かせるところに「やさし」があり、「幽玄」の美があった。「やさし」とは、人と人との倫理だけにとどまらず、「幽玄」とともに、まさしく「ありてなければ」といった無常の美学を表す要語でもあった。

さきに見てきた「弱さ」(「傷つきやすさ」vulnerability)の持っていた問題は、ここでは、「壊れやすさ」「もろさ」「はかなさ」(fragility)といった問題に移行しているが、基本問題としてはそのまま延長して考えることができる。

松岡正剛『フラジャイル』は、そうした vulnerability ≡ fragility の消息についてくわしく論じているが、たとえば、次のような一節などは、——直接「やさしさ」について述べたものではないが——確実にこれまで見てきたような「やさしさ」のある側面を言い当てているものだろう。

「弱さ」は「強さ」の欠如ではない。「弱さ」というそれ自体の特徴をもった劇的でピアニッシモな現象なのである。それは、些細でこわれやすく、はかなくて脆弱で、あとずさりするような異質を秘め、大半の論理から逸脱するような未知の振動体ではないようなのに、ときに深すぎるほど大胆で、とびきり過敏な超越をあらわすものなのだ。

あるいは、谷川俊太郎もこう述べている。

——「やさしさは権力や財力や知力のような強い力の対極にあるものです。やさしさもひとつの力ですが、その力は微かかすで繊細でときに弱さと混同されてしまうような力です。それは競争社会の中では、勝利よりもむしろ敗北をもたらしかねません。しかし、もし私たちが何をもちとも大切に考えるか、その基準をほんの少しでもずらしたとき、やさしさは人間をどんな力よりも強く生き生きした生へと向かわせます」（「やさしさの定義」）。

見てきたように、東山の女や実盛、^(注)「さいき」の女房、また一般にボランテニア活動をうながしている根のところにあるのは、こうした「微かかすで繊細でときに弱さと混同されてしまうような「弱さ」としての「やさしさ」の力であった。

（竹内整一『「やさしさ」と日本人』による）

注

東山の女、実盛、「さいき」の女房は、課題文より前の箇所で、「弱さ」や「傷つきやすさ」を引き受けて果敢に事をなす「やさしさ」の持ち主であるとして書かれた人物である。

問一 傍線部ア～オについて、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは適切な漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「だれがはたして「夢の夢の夢の」世などと簡単に思い切れようか——」とあるが、どういうことか。文章の内容を踏まえて六〇字以内で書きなさい。

問三 Aの「世の中は夢か現つか現つとも夢とも知らずありてなければ」の歌について、用言をすべて抜き出し、終止形をひらがなで書き、品詞と活用の種類、ここでの活用形を答えなさい。

問四 傍線部②「同じように、「やさし」にもまた、そうした契機が多分に見いだされるといふことである」とあるが、「そうした

契機」とはどのような契機なのか。六〇字以内で書きなさい。

問五 傍線部③「微かで繊細でときに弱さと混同されてしまうような「弱さ」としての「やさしさ」の力であった」とあることに

いて、日本の文学や文化を具体例に挙げながら、あなた自身の考えを書きなさい。(六〇〇字以内)